

選抜学生による ピアノコンサート

2021年 10月10日 [日]

14:00 開演 | 13:30 開場

洗足学園音楽大学
シルバーマウンテン 1F

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

主催：洗足学園音楽大学・大学院

PROGRAM

～2021年度特別選抜演奏者～

L.ルジツキ／イタリア 作品50-1 アヴェ・マリア 作品50-3 舟歌
Ludomir Różycki(1884-1953)/Italia op.50-1 Ave Maria op.50-3 Dogaressa.Barcarolle
石崎 美希(学4)

R.シューマン／ピアノソナタ第3番 作品14 へ短調 第1楽章
Robert Schumann(1810-56) /Sonate für Klavier no.3 f-moll 1.Satz
西川 千尋(学4)

S.ラフマニノフ／楽興の時 作品16-1 変口長調
Sergei Rachmaninov(1873-1943)/Moments Musicaux op.16-1 B-dur
神山 果子(学4)

M.ラヴェル／クーペランの墓 1.プレリュード 5.メヌエット 6.トッカータ
Maurice Ravel(1875-1937)/Le tombeau de Couperin 1.Prélude 5.Menuet 6.Toccata
松本 せいら(学4)

-----休憩-----

～ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンスクラス～

F.リスト／巡礼の年 第2年への追加「ヴェネツィアとナポリ」 s.162より カンツォーネ、タランテラ
Franz Liszt(1811-86)/Années de pèlerinage "Venezia e Napoli" s.162 Canzone, Tarantella
江崎 明花(学1)

F.シューベルト／ピアノソナタ 第7番 D.568 変ホ長調 第一楽章
Franz Schubert(1797-1828)/Sonate für Klavier no.7 D.568 Es-dur 1.Satz

F.シューベルト＝F.リスト／「冬の旅」より 菩提樹 s.561
Franz Schubert(1797-1828)=Franz Liszt(1811-86)/"Winterreise" Der Lindenbaum s.561
林 美夢(学2)

F.ショパン／アンダンテ・スピアナートと華麗な大ポロネーズ 作品22
Frédéric Chopin (1810-49) /Grande polonaise brillante précédée d'un andante spianato op.22
吹上 萌(学3)

三善 晃／ピアノ・ソナタ 第2、3楽章
Miyoshi Akira(1933-2013)/Sonate pour piano 2,3 eme mouvement
村木 夏帆(学3)

S.ラフマニノフ／楽興の時 作品16-5 変二長調 作品16-6 八長調
Sergei Rachmaninov(1873-1943)/Moments Musicaux op.16-5 Des-dur,op.16-6 C-dur
増田 茉莉亜(学4)

PROGRAM NOTE

L.ルジツキ／イタリア 作品50 より 1. アヴェ・マリア 3. 舟歌

ルドミル・ルジツキはポーランドに生まれ、主に劇音楽と標題的な管弦楽楽曲を作曲した。「イタリア」は4曲で構成されたピアノのための組曲で、それぞれアヴェ・マリア、カンポサント、舟歌、ベアトリーチェ・チェンチの標題がつけられている。人物や風景、文化などイタリアの様子が題材となり、後期ロマン派的な音楽だがドビュッシーやアルベニスのような無調的、平行和音の扱いもみられ印象派の気配も漂う。

第1曲 アヴェ・マリア／ノスタルジックな雰囲気を感じさせ、演奏時間が2分という短い楽曲のなかでも、主となる旋律が表情を変えながら3度現れ静かに幕を閉じる。人々の祈りが繊細に表現されている。

第3曲 舟歌／舟歌、すなわちバルカローレとはヴェネツィアのゴンドラ漕ぎの歌が由来といわれている。8分の6拍子で軽快な動きを伴い、波や水の反射が刻々と変化していく様子が美しく、ヴェネツィア共和国の元首の妻を描いた音楽的肖像画と評される。メロディーとリズムによって喜びに溢れた表情が、アヴェ・マリアとは対照的である。

石崎 美希(学4)

R.シューマン／ピアノソナタ第3番 作品14 へ短調 第1楽章

ロベルト・シューマンはドイツロマン派を代表する作曲家である。シューマンにとってピアノソナタの作曲とは古典派的な形式ではなく、19世紀ロマン派に則した新しい型を追求するという特別な意味を持っていた。ピアノソナタ第3番は2度の改訂を経て作曲され、主題の提示や動機の展開が他のソナタとは異なった方法で書かれている。

第1楽章冒頭と再現部にはオーケストラのトゥッティを想像させる力強く下行する5度の動機が置かれている。この動機は第3楽章から引用されたシューマンの妻、クララ（優れたピアニスト、また作曲家でもあった）によるアンダンティーノ「クララの主題」である。また、激しい感情が渦を巻く様を表現する分散和音と、それとは対照的な第2主題の軽やかな付点リズムは、夢見がちで感情の移ろいが激しかったといわれるシューマンの性格を表しているといえるだろう。

西川 千尋(学4)

S.ラフマニノフ／楽興の時 作品16-1 変口長調

“楽興の時”の原題はフランス語－Six Moments Musicaux－で、「6つの音楽のひとつ」と訳すことができる。題名の通り6曲から成る作品集で、奇数番目の曲は比較的ゆっくりと、偶数番目の曲は対照的に速く劇的な雰囲気を持ち、全体がロシアの荒涼とした大地を薄暗く美しく描いている。1896年、ラフマニノフが若干23歳でこのような斬新かつ精巧で充実した作品を作り上げることができたのは、前年の1895年に交響曲第1番を完成していることと重要な関係があるように思う。交響曲を書くことと決めてから、片端から本を読破し、孤独を求めて瞑想にふけり、ピアノと五線紙に向かった結果、彼は祖国ロシアの運命を叙事詩で語るという使命を自ら悟ることになる。

交響曲第1番の初演は演奏の不出来も手伝って酷評を受けたが、48年後の1945年、復活初演で大成功を収め現在に至っていることから、若きラフマニノフが祖国への愛のために新しい表現を生み出し、それらは確かな先見性に裏付けられていたことは明確であろう。交響曲の創作を通して得た充実感や斬新さはその後書かれた“楽興の時”にもよく現れており、各曲の対比や配置に交響的な流れが感じられるこの組曲の中で、第1番は暗い大地が薄らと夜明けを迎えるように曲集の始まりを告げる。前半は長いフレーズの内省的旋律が続くが、後半はラフマニノフらしい華やかな和音が潤沢に散らばり、後年の彼の作風、ロシア後期ロマン派音楽、を垣間見ることができる。

神山 果子(学4)

M.ラヴェル／クーブランの墓 より 1.プレリュード 5.メヌエット 6.トッカータ

モーリス・ラヴェルは、スペインの国境近くのバスク地方で生まれた近代フランスを代表する作曲家である。1914年から1917年にかけて作曲された《クーブランの墓》は、ラヴェルにとって最後のピアノ独奏曲である。全6曲からなるこの組曲の各曲は、第一次世界大戦で戦死した友人へ捧げられた。バロック時代を代表するフランスの作曲家フランソワ・クーブランの古典的な形式を用いて美しくまとめられたこの作品は、ラヴェルの作曲技巧が惜しむことなく注ぎ込まれている。

第1曲 プレリュード/ クラヴサン音楽を思わせる古典的な様式で書かれており、細やかな装飾音と、流麗な旋律が無窮動的に流れていく。

第5曲 メヌエット/ 優しい旋律が簡素で美しい和音に支えられた優雅な舞曲である。中間部のトリオには「ミュゼット」と記されており、ドラマティックに少しずつ高揚していく。最後は美しく静かな余韻を残して終わる。

第6曲 トッカータ/ 16分音符の同音連打が一貫して続き、トッカータらしく速い流れの中に多彩な表現が盛り込まれている。曲は進行するごとに緊張感を高め、壮大で輝かしいコーダへと盛り上がり華やかに幕を閉じる。

松本 せいら(学4)

F.リスト／巡礼の年 第2年への追加「ヴェネツィアとナポリ」より カンツォーネ、タランテラ

《巡礼の年》は第1年、第2年、第2年への追加、そして第3年、の4集からなる曲集で、リストが20代から60代にかけて作曲した作品が集められている。今回演奏するこの第2年への追加は、『巡礼の年 第2年 イタリア』と同時期の1837年から39年にかけて創作され、リストがヴェネツィアとナポリで耳にしたと思われる旋律からインスピレーションを受けていると考えられている。

カンツォーネ/ イタリアの作曲家ジョアキーノ・ロッシーニの代表作であるオペラ《オテロ》の第3幕、Canzone : Nessùn maggior dolore(カンツォーネ：これ以上の痛みはない)の主題が用いられる。ヴェネツィアの総督の息子ロドリゴは貴族の娘デズデモーナに恋心を抱くも、黒人の将軍オテロとデズデモーナは密かに結婚の契りを交わす。そこへオテロに嫉妬するその部下イアーゴが現れ、ロドリゴに近づきオテロを陥れる計画を持ち掛け、1通の手紙を渡すというところからオペラは始まる。

第3幕ではオテロが愛するデズデモーナを殺し、その後自分の胸に短剣を刺して終わりを迎える。この主題は不穏さの漂う曲調で、伴奏のトレモロがそれをより強調している。終結部は完全終始せず、タランテラへと続く。

タランテラ/ タランテラとは、毒蜘蛛タランチュラに刺されたら疲れ果てるまで踊り続けなければならない、とする言い伝えがある南イタリア、ナポリ地方の民族舞踊のことで、曲の冒頭は背後から忍び寄ってくる不気味な8本の足がうごめく様子を低音が表しており、鍵盤上のあらゆるテクニックを駆使して踊りはひたすら続く。中間部では優雅なカンツォーネが踊り疲れた足を癒し、つかの間の休息となる。しかし再び狂乱の渦へと引き戻され、高揚と興奮で締め上げるようにして曲は幕を閉じる。

江崎 明花(学1)

F.シューベルト／ピアノソナタ 第7番 D.568 変ホ長調 第一楽章

このシューベルト初期のピアノソナタは二長調で書かれたD.567の異稿である。変ホ長調へと移調されただけでなく、第三楽章のメヌエットが増やされるなど、変更や改良が加えられていることから、シューベルトの作曲技術の成長や変遷、さらには時代ごとの音楽趣味の変化を観察するにも格好の素材といえる。多くのシューベルト作品と同様、古典的な典雅とロマン的な情緒が並存する佳作である。第一楽章はソナタ形式で構成され、提示部の第一主題のやわらかな主題に対し、第二主題の伴奏は全ての音符にスタッカートが記されており、軽い三拍子をイメージする。展開部は16分音符のアルペジオが左右を移行しながら転調を繰り返す。再現部は提示部とは多少異なるリズムと装飾音を加えられ、変奏の要素を含ませている。提示部の第一主題後の3小節は省かれ、転調した第二主題へと進む。

林 美夢(学2)

F.シューベルト＝F.リスト／「冬の旅」 菩提樹 s.561

菩提樹は24曲からなる連作歌曲集「冬の旅」の中の一曲である。リストは素朴な抒情的旋律の美しさ、輝くホ長調の響き、夏の快さと木陰の涼しさと、そして葉のざわめきの夢想を持つこの曲をピアノ曲に編曲した。響いては消えるピアノの三連符の音型によって、微風が樹冠を吹き過ぎていく幻影を喚起する。民謡のような郷愁を誘う旋律が、市門の外の噴水のそばに/菩提樹が一本立っている、という回想のイメージを描き出す。中間部では長調と短調が交替し、伴奏の旋律が冬の嵐の描写となり劇的な語り歌唱になる。

林 美夢(学2)

F.ショパン／アンダンテ・スピアナートと華麗な大ポロネーズ 作品22

フレデリック・フランソワ・ショパンは、ポーランドに生まれた前期ロマン派を代表する作曲家である。ショパンはこの曲を管弦楽付きのポロネーズとして1831年に作曲したのち、ゆったりとしたノクターン(夜想曲)的な前奏を付け加えピアノ独奏曲として完成させた。出版は1836年である。

1834年、ポーランドではワルシャワ蜂起という革命が起こっていたため、ショパンはポーランドから離れパリで演奏活動を行う。日に日に悪化していく祖国の情勢から芽生えた不安や悲しみなど様々な感情は、故郷への強い想い、愛情となり楽曲に表現されている。体が弱かったショパンは同時代に活躍したリストと異なり、大きなホールより限られたスペースでの演奏を好んでいたため、作品はサロンを想定した細やかさがあり、また美しく華やかで技巧的である。曲は前半のノクターンを思わせる優雅さと、後半のポーランドの民族舞踊を基本としたポロネーズのきらびやかさとの対比が特徴的だ。

吹上 萌(学3)

三善 晃／ピアノ・ソナタ 第2、3楽章

三善晃は1933年に生まれた戦後の日本を代表する作曲家の1人である。ピアノ・ソナタはパリ留学中の1956から58年に作曲し、初演の翌年には「今まで日本人によって書かれたピアノ曲の中でこれほどピアノスティックに完成されたものは少ないだろう」（音楽芸術、1959年4月号）と評された。

曲の構成原理とした第1楽章冒頭のE・Ges・Fの3音は、単に旋律動向というだけでなく、黄金分割和音を中心とする和音諸系列や調的志向性になう完全5度と長短3度関係、各楽章の対比にも用いられ、あらゆる論理的可能性の根拠としても機能している。第2楽章はアンダンテ。中間に速い幻想をはさんだ変容を含む3部形式。そして第3楽章はプレスト・ロンドとコラル。この曲全体の和声的、旋律的な主軸である半音階の図線を、全音階に広げたものが使われており、心理的には抑圧から解放、不安から生氣、陰から光への構図と言える。

村木 夏帆(学3)

S.ラフマニノフ／樂興の時 作品16-5 変二長調 作品16-6 八長調

この曲集は1896年の10月から12月にかけて作曲され、儚く悲しげなもの、叙情的で美しい旋律を持つもの、華やかで生き生きとしたものなど様々な表情を映し出す。

第5番 / まるで淡い光が差し込むような温かな出だしから曲が進んでいくと、少しずつメロディが動き始める。希望に満ちた変ト長調を経て頂点に達し、一瞬、短調の匂いや予想もしなかったホ長調へと漂いながら、徐々に静寂のなかへと戻ってゆく。ショパンのノクターンの影響を受けた曲とも言われている。

第6番 / とても前向きで活気を持った作品であり、幅広い音の層を用いた重厚な響きを必要とする。途中、宇宙を颯爽と駆け抜けるかのようないくつもの転調をみせ、壮麗なカノンが繰り広げられる。コーダは美しく煌びやかな音色で、最後に再びテーマが登場し、曲は堂々と締めくくられる。

増田 茉莉亜(学4)

PROFILE



石崎 美希 *MIKI ISHIZAKI*

栃木県出身。宇都宮短期大学附属高等学校音楽科卒業。5歳よりピアノを始める。
3年次よりピアノ指導者養成クラス在籍。2021年度特別選抜演奏者認定。
これまでにピアノを小久保素子氏、ソルフェージュを高鳥舞氏に師事。
現在ピアノを江崎昌子氏に師事。

西川 千尋 *CHIRO NISHIKAWA*

石川県出身。第42回ピティナ・ピアノコンペティショングランミューズYカテゴリー本選優秀賞。Danubia Talents International Music Competition Dカテゴリー1位(ハンガリー)。Odin International Music Competition 1位。Franz Liszt Center International Piano Competition 3位。いしかわ・風と緑の楽都音楽祭2021ピアノコンサートin赤羽に出演。2020年度前田音楽奨励賞受賞。2021年度特別選抜演奏者認定。これまでに野村八千代、井口愛弓、浅田真弥子の各氏に、現在赤松林太郎氏に師事。



神山 果子 *KAKO KOUYAMA*

埼玉県出身。埼玉県立川越女子高校卒業。2021年度特別選抜演奏者認定。
第36回ピティナ・ピアノコンペティション連弾中級A全国大会出場。第9回日本バッハコンクール全国大会出場。第45回ピティナ・ピアノコンペティショングランミューズDカテゴリー本選奨励賞。これまでにピアノを鳥羽瀬優美、鳥羽瀬宗一郎の各氏に、室内楽を清水将仁氏に師事。



松本 せいら *SEIRA MATSUMOTO*

北海道出身。5歳よりピアノを始める。第10回シヨパン国際ピアノコンクール in ASIA アジア大会入選。第20回、21回大阪国際音楽コンクールピアノ部門 Age-Uファイナル入選。第22回シヨパン国際ピアノコンクール in ASIA 全国大会入選。2019、2020、2021年度ピアノコース特別選抜演奏者認定。
これまでにピアノを太田代路子氏に、現在ピアノを吉武雅子氏に師事。
室内楽を安永徹、市野あゆみの各氏に師事。





江崎 明花 *MEIKA ESAKI*

福岡県出身。4歳よりピアノを始める。これまでに内田悦子、山本佳代子の各氏に師事。現在、鳥羽瀬宗一郎、浦壁信二の各氏に師事。

ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンスクラス在籍。

林 美夢 *MIMU HAYASHI*

東京都出身。都立総合芸術高等学校卒業。2016年ピティナ・ピアノコンペティション全国大会連弾ベスト11賞受賞。現在、泉ゆりの、鳥羽瀬宗一郎の各氏に師事。ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンスクラス在籍。



吹上 萌 *MOE FUKIGAMI*

長野県出身。3歳からピアノを始め、大森晶子氏に師事。信濃毎日新聞主催、第27回長野県ピアノコンクール5・6年生の部最優秀賞受賞。第32回長野県ピアノコンクール高校生の部最優秀賞受賞。その他数々のコンクール入選、入賞。交流の響き2018 inかわさきに長野県代表で出演。第21回ワーブル・インターナショナル・ピアノウィークに参加。2017ピアノフォーラムin仙台に参加。これまでにディアナ・アンデルセン、アラン・ヴァイス、ヨハン・シュミット、菅野潤、庄司美智子、秦はるひ氏のレッスンを受講。現在、浦壁信二、日置寿美子の各氏に師事。ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンスクラス在籍。

村木 夏帆 *KAHO MURAKI*

中央大学附属高等学校卒業。1歳より一音会ミュージックスクールにてピアノを習い始める。2021年度「電子オルガンによる管弦楽曲とピアノ協奏曲の夕べ」にソリストとして出演、モーツァルトのピアノ協奏曲第20番を演奏。現在、室内楽を清水将仁氏に、ピアノを松山優香、山田武彦、松山元の各氏に師事。ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンスクラス在籍。



増田 茉莉亜 *MARIA MASUDA*

福井県出身。第2回洗足学園学内ピアノコンクール優勝。第24回「長江杯」国際音楽コンクールピアノ部門大学の部第3位入賞。スタインウェイアンドサンズ東京主催「フレッシュ・ジョイントコンサート」に出演。2018年ショパン音楽大学夏期セミナー修了コンサートに出演。2019年洗足学園主催「電子オルガンによる管弦楽曲とピアノ協奏曲の夕べ」に出演。現在、江崎昌子、浦壁信二の各氏に師事。ピアノ・プロフェッショナル・パフォーマンスクラス在籍。